《論　文》

社会的再生産論よりみた地域社会論(4)
――新しい「都市」と「農村」の関係を求めて――

内　田　　司

現在の地域社会研究においては，もはや，都市・農村の対立の止揚を課題とするのは，時代錯誤的になったと言われてきた。日本においても，とくに高度経済成長期以降の地域社会の激変ともいえる変動が，実体としての都市・農村を解体してしまったとみられている。連載からなる本稿は，そうした地域社会研究の課題をめぐる主張の批判的検討を行うことを課題としている。そして，グローバル化している現代資本主義の発展にもとづく地域的不均等発展の深化によってもたらされているさまざまな問題――世界的な南北問題と紛争問題，過密過疎問題，都市問題，環境・エネルギー問題などなど――を解明するためには，都市・農村の対立を止揚するという視角は，現代地域社会研究にとって重要な視角であることを立証したい。その一環として，本論文では，都市・農村の「対立（distinction）」はもはや消滅したと説く，地域社会（リージョン）研究を批判的に吟味している。

〔キーワード：グローバル化，近代化，地域的不均等発展，都市・農村の対立〕

目　次

序　問題の所在
第一章　地域社会研究における都市・農村研究からリージョン研究への移行
　第1節　福武直氏の農村社会研究（65号）
　第2節　羽仁五郎氏の都市研究（66・67号）
　第3節　都市・農村研究からリージョン研究へ（本号）
第二章　社会的再生産論よりみた都市・農村関係論
第三章　アジット・シンとハミッド・タバタバイの「発展途上国」の農業と経済の発展論
結　語　新しい都市と農村の関係を求めて

第一章　都市・農村研究からリージョン研究へ

第3節　都市・農村研究からリージョン研究へ

都市・農村の定義

前回まで羽仁五郎氏の農村社会敵視論的＜都市＞論を検討してきた。しかし，日本の戦後の高度経済成長期以降の激変ともいうべき地域社会変動によって，羽仁氏の＜都市＞論が前提にしていた都市や農村の現実もまた大きく変化し，もはや，都市・農村の「対立」は消滅したと

いわれるまでになっていった。本論は，そうした都市・農村の「対立」の消滅を論じているリージョンとしての地域社会研究を取り上げ，批判的に吟味してみたい。具体的には，そうした地域社会変動を都市化として把握したディキンソン氏の『都市とリージョン』を取り上げることにする。まずはじめに，地域社会変動を都市化として捉え，都市化によって都市・農村の「対立」がなくなっていくと説く，ディキンソン氏の都市と農村の定義に関わる議論から参照することにしたい。

都市と農村の定義は，都市と農村の内面的な関係からの定義といくつかの外面的な諸指標にもとづく定義に区別する必要がある。それは，都市・農村関係の変化を探究し，都市・農村の「対立」が消滅するとは，設定された外面的な諸指標にもとづくどのような都市および農村の変化によるのかを明らかにするためである。では，ディキンソン氏は，都市と農村の内面的な関係をどのように定義していたのであろうか。ディキンソン氏は，都市を定義するなかで，都市と農村の関係を次のように定義していた。ディキンソン氏いわく，「都市とは，経済的機能の単なる寄せ集めではない。永い歴史を通じて，都市は他のなによりも農村の人々のために奉仕する施設が置かれている所であった」[(1)]と。すなわち，ディキンソン氏によれば，都市とは農村へ奉仕する地域社会である。この定義でもわかるように，ディキンソン氏は，はじめから都市と農村の関係が，本質的に，対立するものとは認めていなかった。ディキンソン氏によれば，都市と農村の間には，対立ではなく，相違（distinction）があるだけなのである。

では，ディキンソン氏は，農村に奉仕する都市と都市に奉仕される農村の，いくつかの外面的な指標にもとづく相違をどのように把握していたのであろうか。ディキンソン氏は，都市と農村の相違をはかる指標として，産業および諸サービス諸機関の立地にかかわる土地利用，地域住民の職業構成，人口と人口密度（分布），そして，生活の様式と水準の四つの指標をあげていた。そこで，まず，土地利用による都市と農村の違いを見てみることにしよう。ディキンソン氏によれば，第一次産業[(2)]のための土地利用とその第一次産業に従事する人々の住居が立地している地域が農村であり，行政および第二次と第三次産業に従事する諸機関およびそれらの諸機関で働く人々の住居が立地している地域が都市である。ディキンソン氏は，とくに，都市的なものとして，工業生産に従事する工場と行政サービスや公的・民間的商業および文化・レクレーションサービスなどの各種サービス諸機関の立地とそれら諸サービス諸機能の集中と集積を重視している。すなわち，「都市的集落は最も広義には，文明社会のサービスに必要な多様な特化した機能群が特定の場所で組み合わさることから起こっている。これらの機能は恐らく，実際にも，広く各地に散在して行われている。…町としての性格をとり始めるバランスのとれた集落が生起するのは，いろいろな機能，特にサービスと社会経済機能が集まること」[(3)]によるのである。

次に，地域住民の職業構成を指標とした都市・農村の区別に関する議論を見てみよう。この点に関しては，農業を職業としている人々が相対的に多数を占めている地域が農村であり，そ

のほとんどが工・商業および上記の諸サービスに従事する人々が占めている地域が都市である。興味深いことは，ディキンソン氏が，ある行政的範域をとった場合，その行政的範域の地域社会がこの職業構成の指標に照らして農村的・都市的と表現することができたとしても，その行政的範域の地域社会全体を必ずしも農村または都市であるとは見てはいなかったことである。すなわち，都市・農村とは行政的範域の地域社会の性格規定ではないのである。ある行政的範域の地域社会の中に都市も農村もある場合があるし，その範域を越えて都市的であったりする場合も大いにありうるのである。ただし，通常は，ある行政的範域の地域社会は，その地域社会における「中心的機能」をはたす都市部とその都市部の周辺に位置する農村部を含んでいると，ディキンソン氏は見ていた。氏は，シェラー氏を援用しある範域の地域社会の都市・農村関係構造を次のように叙述していた。すなわち，「シェラーは中心地と周辺農村の従属地域の機能を検討してさらに調査を推進した。…中心的機能 —— 交通，行政，経済，教会，文化，衛生と交易というグループ内の —— の集合がその地の中心性の物差しとして用いられている。中心的機能の内訳は次の通りである。官吏，協会，教会，学校，病院，医者，薬剤師，歯科医，弁護士，税務署，銀行，映画館，新聞，印刷業者，小売業者，市場」(4)。そして，ある範域の地域社会は，その中心地の「密度と範囲によって，中心地の地域的広がり，または地域的吸引力は都市範囲の段階のある配置を決定する。ウムランド（周域）Umlandという語が…中心地に最も近く，中心地の日常生活に親密に関わっている都市範囲の部分…（を構成する）。…この範囲の外側では，もっと特殊な，時々の機能がなされている広大な地域がある。ここでは多くの接触は農村から小さな町に直接になされ，時によると特殊な商品やサービスは中心都市から受けている。シェラーはこの広い地域をヒンターランド（後背地）Hinterlandとして描写している。その範囲より外は中心都市と時々は接触がある，広く散在した場所で，同様に同じ高次の他の都市とも接触している。周域はこんな風に低次の機能でカバーされ，後背地は第2次の機能で，影響地域Einflussgebietは高次の機能でカバーされている」(5)〔（を構成する）は引用者による。以下断りのない限り，（　）や傍点などの強調は原文による〕と。ディキンソン氏によれば，このように都市と農村は分離され，それぞれバラバラに存在する地域社会ではなく，都市を中心として有機的に関連してある範域の地域社会を形成しているのである。

しかも，その都市的センター・農村部関連構造を有する地域社会は，より大きな都市の影響圏にヒエラルキー的関係の下で包摂されている。そのより大きな都市が「中心都市」と呼ばれていたものである。そして，そうした中心都市を核とした入れ子構造的都市・農村関係構造をもつ地域社会を，ディキンソン氏は，リージョンと呼んでいる。ディキンソン氏のいうこのリージョンとしての地域社会とは，広がりでみると日本で言えば既存の都道府県の行政単位をも越えるもので，リージョン内はいくつかの大小の諸都市が有機的に連関し，かつヒエラルキー的都市間関係構造をなして存在している地域社会のことなのである。別言すれば，リージョン内には，中心都市とそれ自体都市的センター・農村部関連構造をもつより小さい都市がヒエラル

キー的関係を形成して存在している（以下，この諸都市の中の中心都市を核とし，いくつかのより小範域の都市的センター・農村関連によって形成されている地域社会が入れ子構造になって存在しているという地域構造を有している地域社会をリージョンと記述する）。そして，同じくディキンソン氏によれば，それゆえ，都市の成長と発達（都市化）の点から見ると，一国内の「空間的組織は，局地的 local，広域的 regional，そして全国的 national」[(6)]という構造を有しているのである。

では，リージョン内のある範域の（必ずしも行政的範域とは限らない）地域社会が，職業構成という指標に照らして農村的という場合，その地域社会の住民全体に占める農業者の割合を，ディキンソンはどれくらいと見ていたのであろうか。ちなみに，鈴木栄太郎氏は，農村的地域社会である「村落」とは，「農業人口が九五％以上の聚落社会」[(7)]と定義していた。ディキンソン氏は，この点での明確な定義は行っていないのであるが，リージョン内のより小さな中心地（「局地的中心地」）を核とした地域社会を論じる中で，その範域の地域社会における農業従事者が３分の１以上を占める地域社会を農村的地域社会と記述していた。すなわち，農村的地域社会における「中心地は小さいというだけでなく，農村的構成要素が大きいから小町とか，農村都市的中心地と呼んだ方がよいかもしれない。以下のものが一人前の町 townということになる。『局地中心（ローカル・センター）』という風に何となく味気ない呼び名をつけられているが，農業従事者は常に人口の１／３以下で，第３次産業人口構成は少なくとも１／４で１／２までいくこともある」[(8)]と。

ディキンソン氏は，都市・農村の関連構造によって形成されているリージョンの，人口規模やその分布（密度）から見た都市と農村の違いはどのように論じていたのであろうか。この点で言えば，その数は，リージョンの核になっている中心都市の大きさによって異なるが，人口を集中し，かつ人口密度も高いのが都市であり，反対に人口もすくなく，かつその人口も分散しているのが農村である。すなわち，中心都市のさらに中心部分（ディキンソン氏は，これを「中心業務地区（帯）」と呼んでいる）を例外として，中心都市を核としたリージョンの同心円的地域社会構造に即して中心から遠ざかるにしたがって人口密度が低くなるように人口分布は生じているのである。ディキンソン氏によれば，「現代都市における遠心的力と求心的力の相互作用は人口分布と動態に最もはっきりと反映している」[(9)]のである。これは，大きな都市ほど明瞭に現われる。ディキンソン氏いわく，「非常に大きな都市では，密度は先に要約された同心円帯と密接に結びついている。…リバプールとバーミンガムの例が…（表１）に出ている。まず第１に，都市中心の密度は比較的低い。ここは都市機関の心臓部であり，昼間は活動が活発に行われ，守衛の人人や，スラム地区，それにホテルやアパートのブロック（金持ちのと貧しい人々のと両方とも）以外は夜は人影がなくなってしまう。この理由で75万人以下の人口の都市では，国勢調査の中心地区人口には，業務中心地と変動過程にあるスラム地区が両方とも含まれるので，人口密度は非常に高いことになる。しかし一般的傾向としては，スラム街

は逐次的ではあるが一掃されるか放棄されてしまい，その住民は移動するか，どこかに移動させられるのである。第2には核心の周囲には最も密に建てられた住宅地域があり，ここが普通全体として最高の人口密度をもっている。それより外側の19世紀終わりから1914年までに建てられた土地は空閑地が多くあり，密度は低い。最後に郊外縁辺部では密度は――総体的にいっても連檐している土地の1エーカーについても――最低である」[10]〔(表1）は引用者による〕と。

表1　**人口密度**（同心円帯におけるエーカー当り人工密度）

	リバプール（1931）		バーミンガム（1938）	
	エーカー	人口／1エーカー	エーカー	人口／1エーカー
中心帯	1,600	59	3,000	62
中間帯（内部）	3,300	96	9,000	32
中間帯（外部）	2,800	52		
外部帯	17,000	17	39,000	15
計	24,700	34.5	51,100	20
総　人　口	855,700		1,050,000	

R．E．ディキンソン『都市と広域』木内信藏・矢崎武夫訳，鹿島研究所出版会，1974年より引用

さらに，ディキンソン氏によれば，大都市の平均人口密度は，世界的に驚くほど一定であるという。氏いわく，「大都市の全体的な平均密度は驚くほど一定である。合衆国の大都市都市化地域では1平方マイル5,400人（1万キロ約1,900人）であり，イギリスの平均はほとんど精密に1平方マイル当り6,400人（1万キロ2,000人），または1エーカー当り10人（1ヘクタール当り20人）である。ドイツでの数値は1951年には1平方マイル当り5,000人（1万キロ当り1,800人）であった。しかしながらこれらの平均値には大きな違いもあって，大きな集合体――たとえばニューヨーク市，パリ，ロンドン，東京――のより密集して人が住む地域では，総体的な密度は1平方マイル当り2万5,000人から3万人（1万キロ9,000～1万人）」[11]であったと。

次に，生活の様式と水準の指標で見たときの都市と農村の違いについての議論を検討してみよう。まず生活様式の面からいえば，商品と各種の公的・民間的サービスに依拠する生活をしているところが都市であり，より自給自足的生活をしているところが農村である。生活水準の点から言えば，より高次の商業的，または各種の公的・民間的サービスを享受することができる高い生活水準を有しているのが都市であり，相対的に低い生活水準に止まっているのが農村である。それゆえ，歴史的に，人口は農村からより便利で，高い生活様式と生活水準をもっている都市へ流れてきたのである。とくに近代以降の都市における急速な経済成長は，商品経済に依拠した豊かな物質的生活とより充実した各種のサービスによって便利な生活を実現してきた。すなわち，商業的，または各種の公的・民間的サービスに依拠した都市的生活様式の下で

は，生活水準の向上とは，「消費物資，住宅や自動車へのさらに増加する要求を意味している」[12]。さらに，「より高い生活水準とは1日8時間労働，週5日の労働，有給休暇，かなりの退職年金（特に合衆国では），それにさらに多くの教育を意味している」[13]のである。

ディキンソン氏によれば，とくに1950年代以降の都市の急速な経済成長による「あらゆる種類のビジネスの量の増加は，結果として第3次産業従事者の数をさらに増加せしめた。この高い生活水準と教育・研究の発展をもってすれば，かつてなく多くの若い人々が，ジャン・ゴットマンいうところの第4次産業に就いている。アメリカでは若者の50％を大学に入れることを目標としており，このことは学生人口のための多くの大きな新しい地域社会の成長を意味する。イギリスは10％を目指しており，その大学拡張の計画は控え目で排他的である。ヨーロッパ大陸各国の大学は，設備は不充分であるが門戸を大きく開放した。これらの大学はアメリカの大学と大きさの点で競いあっている。あらゆる種類のサービス業の成長はホワイトカラー革命であった。つまり今や花盛りを迎えた新技術時代の表現である。50年前に『新技術』neo technique時代のことを述べた時のように，現在『生技術』bio techniqueについて話すのも空想的なことである。われわれはこのような新時代への入口に立っているかもしれないが，原子力と宇宙旅行は未来の先駆者であるが，今までのところは社会に対してほんの僅かの衝撃を与えたにすぎない」[14]のである。この引用文によってもわかるように，ディキンソン氏は，都市産業におけるサービス産業化と生活水準の高度化を正比例的なものと見ていた。

都市化とは

ディキンソン氏は，現代社会における地域社会変動の方向性を都市化として把握していた。そこで，次に，ディキンソン氏のいう都市化とは何かを検討しながら，同時に，なにゆえ氏は地域社会研究に都市・農村の関係構造をもつリージョン概念を導入しなければならなかったのかということについても明らかにしていきたい。まず，ディキンソン氏は，都市化をどのように把握していたのかということについて見ていくことにしよう。都市化とは，まずなによりも，都市の発生と成長・発展のことであり，以下の二つの側面をもっている。第一は，都市の定義をめぐって検討してきた都市的なるものの諸要素（土地利用，産業および公的・民間的諸サービス諸機関，人口および人口密度，そして，生活の様式と水準）をもった地域社会空間の質量ともの広がりの深化である。第二の側面は，第一の側面の深化により，都市的ではない地域社会，すなわち，農村における，土地利用，住民の職業構成，生活様式および水準等々の点での都市的要素の深化である。では，これら都市化の二つの側面は，都市の歴史的成長・発展過程の中でどのように進んできたのであろうか。

くりかえしになるが，ディキンソンによれば，「都市的集落は最も広義には，文明社会のサービスに必要な多様な特化した機能群が特定の場所で組み合わさることから起こっている」[15]。それらの諸機能は，はじめは，恐らく各地に広く散在していた。そして，「町としての性格を

とり始めるバランスのとれた集落が生起するのは，いろいろな機能，特にサービスと社会経済的凝集の機能が集まることによ」[16]ってであった。ただし，「このような集落の性格とか状態は，場所によっても地域や文化領域によってもそれぞれ異なるし，また文化発達の各時期においても異なっている」[17]のである。ただ形は違っても，「歴史を通してどの都市の機能も三重になっている――つまり文化的，行政的と経済的なものである」[18]。

西ヨーロッパを例にとるならば，歴史的に見て最初は，「ラテン語のキビタス civitas が文明 civilizationと都市 city の共通の語源である。この言葉はもともとは，ローマ帝国下の組織された地区を指すために用いられた。が後にキリスト教の司教職が置かれていた地区の中心または司教管轄区を表すようになった。フランスでは，この中心核がシテ cité になったのである。…シティという言葉は未だに（広く不正確ではあるが）イギリスで大寺院がある町を表わす言葉として用いられている」[19]。このように，「キビタスという言葉は，中世の初期まで文書のなかでいろいろな都市的集落の様相を表現するのに用いられていたが，20世紀の中頃までには，さらに正確な意味をもつことになった。それは，自由あるいは公民のための自治の権利を有する特別の法律を保持する密度の高い集落を意味することになったのである（ドイツ語では Stadtrecht，都市法をもつ都市をいう）。普通は市壁 Stadtmauer に囲まれていて，その中心となる場所の一つまたは数か所で開かれる市場があった（市場をもつ権利はその集落の萌芽期に与えられた普通の特権であった）。このような集落はまた商工業の地であり，これらはギルドによって運営され，大部分は統制されていた。civitasの同意語は，フランス語の ville，ドイツ語の stadt，それに英語では townである。しかしこの言葉は，地域によって成長の条件が違うために，すべての都市集落をカバーしてはいない。上に挙げた性格のうちの一部のみしかもたない場所は無数にあり，そこでは農業や，あるいは低次の機能と混ざり合っている」[20]のである。

さらに，都市の歴史的成長・発展の過程では，ある地域的範域のいくつかのそうした都市的集落（町）の中でより高次の，より中心的な諸機能をはたす都市的集落が突出してくる。かかる諸町群の中の中心的町を都市と呼ぶと，ディキンソン氏はいうのである。すなわち，「都市に関する一貫した定義はない。それはいろいろある町のなかである程度リーダーシップをもつ町」[21]のことなのである。ディキンソン氏は，こうした都市集落の中の都市集落を中心都市と呼ぶ。かかる傾向は，「産業および商業革命後」[22]，都市の成長にとって経済的機能がより重要になってくるなかで，ますます，強まっていった。ディキンソン氏によれば，「現代では，都市人口の巨大な成長によって新たな中心地がつくられた。しかし，それよりは歴史的な町が人口とその面積に関して拡大される場合が普通であった。過去100年以上に亘って，都市の成長にとって経済的機能が次第に重要になると同時に支配的になってきた。なかでも商業は，都市の歴史的な核の位置にますます機能を集中させてきた。ヨーロッパで用いられているシティ cityの語は，過去75年の間に都市構造の顕著な要素となったビジネス中心地を指すのである。

ある都市の中心の機能的重要性は，その中心のビジネス区域の物理的大きさから測られる」[23]のである。

このように都市の歴史的成長・発展の過程をたどってくると，「都市の性格には三つの側面があることが明らかになるであろう。それは明確な機能，明確な形態（物理的形態）と，そして程度や様式に差はあるが，地域的配置と構成である」[24]。これらのなかで，現代都市にとって最も重要な性格は，ディキンソン氏によれば，ある広い範域（より小さな農村の地区センターや町，さらには，より低次のサービス機能をはたしている小都市を内包している）をもつ地域社会における「地域中心としての…性格」[25]である。

では，かかる中心都市の成長・発展は，どのような形で起こっていくのであろうか，そして，どのようなリージョンとしての地域社会変動を引き起こすのであろうか。ディキンソン氏は，中心都市の成長・発展としての都市化に関して，「都市内の利用と活動の立地と都市地区内におけるそれらの分布に貢献している種々な力」[26]に着目している。そして，都市化にさいして最初に働くのが，都市の求心力としての「集中」と「凝集」の力であった。すなわち，「人々が活動するとき『空間の摩擦』に打ちかつために都市に集まることが都市成長過程の根本であるといわれてきた。必要とするサービスは集団の中心地において最も有効になされうる。このことは工業，商業あるいは行政にとっては真実である。この中心化の過程が過去における都市の起源と現代の成長の第一の原因である。ほとんどすべての現代の都市盛衰の中核をなすのは歴史的中心である」[27]。さらにディキンソン氏のことばで敷衍すれば，「都市成長におけるすべての時期において，求心力は支配的役割を演じてきた。西洋社会における発展の各々の時期を通して，町々は住民の住所になると共に施設が構造となって凝固することから都市が出現してきた。西ヨーロッパで永久的形態をとった最初の建造物は教会や政治的支配者の城砦であった。その前，長きに亘って存在した仮の集まりとしての制度上の配置とは違って，市場が永続的な建築物という形態を採ったのはずっと後の発達のようである」[28]。

ただし，「仮の集合地のすべてが市場交易や工芸の場となったのではない。地域的な機能を働かすために特にすぐれて中心となる位置にあったそのなかの二，三の地点が都市的発展をとげたのである。ひとたび12世紀中頃に中世の町という考えが成熟すると，新しい集落が市場の中心としてつくられ，これらは新しい町の焦点となる施設となっていった」[29]。すなわち，「求心力によってこれらの諸施設は，従属地域へのサービスのために１か所に集められた」[30]のである。このように，「ハイウエイや鉄道出現以前には，都市は必ず極度に密集してまとまり，求心力によって支配されていた」[31]。ベデカーの「西ヨーロッパの都市平面図によれば，1900年になっても比較的大きな町でさえきちんとまとまって，市壁で囲まれた核心の周囲に集まり，周辺の農村からは明確に区分されていた」[32]のである。

都市の成長・発展は，サービス諸機能や人口の集中のことを意味するだけではない。ディキンソン氏によれば，都市の成長・発展につれて，集中してきた都市の諸機能に応じた土地利用

の分化が現われるのである。これが氏のいう凝集である。すなわち，「凝集は，都市内のある区域に，非住宅用あるいは住宅用であれ，類似する土地利用が集まる傾向をいう。この過程は住宅，各種のサービスや機関の集合を引き起こす。中心業務地区，商業副都心，それに地域に工場が集中すること等に現われる。それは家庭と仕事場を往復する労働者の日々の動きのリズムの根底に存在するものである」[33]。同じく，ディキンソン氏によれば，かかる凝集，すなわち，「都市の土地利用を位置づけるのは三組となった条件により決定される――経済力，社会的態度や価値，それに公共の法律である」[34]。

これら三組の条件のうち，経済力と社会的態度や価値についてのみ，ここでさらにディキンソン氏の議論を参照しておこう。氏によれば，「経済力の働きは，需要供給の法則が自由に働くこと，どの部分の土地利用も最大限の経済有効性――つまり，ある特定の目的のために土地を購入することから得られる報酬の最高――という要因によって決定される」[35]ということである。別言すれば，経済力とは，「都市活動の立地における『能率の力学』」[36]であり，「空間の摩擦」を最小限にする努力のことである。「つまり距離という要素を克服するための費用と時間のことである。各各の活動は距離の費用が最小になる土地を探す。不動産市場での競争の過程を通して，その土地のもつ固有の位置的属性を最も有効に開発できる活動が多分そこを獲得する」[37]ものなのである。

ディキンソン氏によれば，かかる経済力にたいしていわば対抗的に働くのが，社会的態度や価値である。すなわち，「経済力は他の条件により相殺される。そのなかには社会的価値や態度が含まれる。このような力は特に人間生態学者たちにより研究されてきた。このような集団の態度（や）…公衆の利害も，社会的に望ましい目標，たとえば健康を保護する福祉，道徳とか人々の安全等を推進するための法律を発展させていくことにより，土地利用を決定していく。これは衛生，住宅，建築規則，住宅地での非住宅使用場所の管理，大気汚染に対する保護，事故，雑音，臭気と煤煙，それに公衆の好みに合わないと考えられる建築物申請に対する保護に関する規則に反映している。最も広く取り締まっているコントロールの一つが，住宅地の人口密度管理を通して行使されるものである」[38]〔（　）は引用者による〕。かかる視点から，都市における土地利用の公的管理の要求が生まれる。アメリカでも，「最近，土地利用管理を公共の利益のためになすことには五つの目的があることが発表された――土地利用を導くこと，土地の誤った利用を抑制すること，土地を荒廃させることを防ぎ，利用していないあるいは利用できない土地を調整すること，土地の再利用（都市再開発，スラム街の除去，住宅再建）を導くことでである」[39]。

こうした経済力や社会的態度と価値の力による都市における土地利用の分化，すなわち，凝集は，リージョンの中心都市の中心である中心業務地区を形成する。そして，これが都市化における特に目立った特徴だと，ディキンソン氏は見るのである。氏いわく，「都市地域の異なった部分における機能分離に関して述べると，西洋社会のすべての都市に共通であり（そして他

の文化的領域をもつ前工業社会では他の原則が働いているのにその地域が残されていることは注意をうながされるべきだが)，大変目立った現象は，『100％の配置』という中心におけるビジネスとサービスの高度集中である。この中心地域はとても小さい――多くの場合，市場と向かい合っているか，あるいは小さな都市では一つの通りに面している――のだが，大きい都市では，大きくしかももっときちんとした形になっている。ビジネスとサービス――商店，ホテル，事務所，レストラン，公共建造物――が一般に集中しているだけでなく，その地域内でそれぞれのサービス業はまた区域毎に分離されている。この中心における空間の需要は非常に大きい故に，都市のなかでここが常に最高の地価を維持している。中心部で空間に対する需要の大きいことは，その構造に二重の影響を与えている。第１に，垂直に延びていく傾向，つまり高層ビルの建築と，水平に拡大する傾向である。この水平拡大には普通はビジネスのための使用に適さない住宅用建物に置換していくことを含んでいる」[40]と。

都市が，とくに，水平拡大の圧力によって，かかる中心業務地区の空間を外延的に広げていく，ディキンソン氏のいう「分散」が，都市化を遠心的に推進する力である。分散とは，「既存の都市地域内の集中をさけて人々や事業所が外の広い土地へと移動していく傾向を指している。これは求心力に対して遠心的傾向をもつ力の結果である。これは部分的には都市的複合体のどの部分へも安く輸送されうる手段が存するということになる。また中心業務地区の過密の故でもあり，特にその周囲の古い，しばしば住むに耐えない時代遅れの住宅地域のためでもある」[41]。この引用文にもあるように，ディキンソン氏によれば，分散は，とくに交通機関，とくに自動車と道路網の発達を機に加速度的に進んだという。すなわち,「まず第１にハイウエイ。過去50年間に亘る自動車道路の普遍的システムの出現は距離による摩擦を大幅に減らした。ほとんどの国でも今日貨物と乗客の多くは道路により運ばれる。自動車は自由に動き回れ，短距離や小量の貨物量のための経済的な運び手であるという事実に基づいて都市とその後背地との密接な接触を増大し，事実上いたる所でそのようになっている。『農村と都市が実際に接触し，そして・・・田野と中心とはほとんど触合しているよう・・・』」[42]なのである。そして，都市化のこの側面が，「過去30年から40年に亘って現代都市発展のなかで最も顕著であり，また根本的な現象であった」[43]。

都市化における遠心的力の作用は，さらに，「離心」と「再集中」という都市化の様式を引き起こす。ディキンソン氏によれば，「分散が意味するのは，都市複合体のもつレンガとモルタル（既成市街地）を外へ散逸せしめたというだけである。それに反して離心が意味するのは，ある特定の都市のもっている活動――工業，商業あるいは行政――が，それ自体が独立した一地方のリージョナル・センターとして機能している別の都市へ分散させることである」[44]。例えば，「1939年～45年の戦争中，行政機能の分散が特に重要であった。分散過程は大都市の周辺とさらに広大な地方の両方において，かなりの期間進行した。このことは現存する小さな町や『田園都市』garden citiesや『衛生都市』satellites（これらの用語の適切な意味において）

の発達に証明されている。イギリスの計画の方針は自己完結的な新しい町を創り，農村にある小さな町に工業が移りゆくように進めることであった」[45]のである。

また，「再集中は離心よりも都市成長の過程を表現する言葉としてはるかに意味深い用語である。離心は，もし文字通り解釈すると，都市地域から余り過密でないどこか他の場所に機能を分散するという意味しかもたない。再集中は，厳密には離心された活動が他の活動とグループを組み直す過程を意味する」[46]。そして，これによって，「離心した工場も中心地をもつ統合された社会と関連して改めて立地することもある」[47]のである。この再集中は，ガストン・バルデ氏の説を借りていうならば，次の四つの形をとると，ディキンソン氏はいう。すなわち，「第1に，相互に補足しあっている巨大な設備を1グループとする。第2に，小さな工業上の設備を地方都市に移す。第3に主要な村落に小規模企業を分散せしめる。第4に零細企業を少数の従業員からなる小さな家内企業に分散して入らせる。これら四つの場合とも，それが自然的傾向であれ，計画的発展の目的としてであれ，すべての国で見られるものである。その各々の場合において，中心地は規模と分布の両面で違った形を採り，違った種類の空間構造を包含している」[48]のである。

これら再集中の四つの形態のうち，第1の形態は，新しく，しかも大規模の鉱業都市ないしは工業都市を出現させ，第2～4の諸形態においては，中心都市の周辺の町や農村センターを工業化し，より発展させる。すなわち，第1の形態に関していえば，「一つあるいは複数の巨大な独立した単位からなる大工業複合体は，現代における重要な成長の姿である。このような複合体は，有利に既存の都市につけ加えることはできない。それら自体で新しい都市の核とされる必要がある。…第1に，鉄鉱業であれ，石油精製所，化学工場，あるいは1万人から5万人の労働者が従事している新しい炭鉱（ルールのような）であれ，大きな工場は核となり新しい地域社会発展の基礎となりうる」[49]のである。また，第2から4の形態における「工業立地とそれに関連する住宅を含む集落の二次的発展は，空間の組織化という面で普通にみられる傾向である。その相対的な重要性は各国，各地域で非常に違っており，それはこれらが主としてその地の経済的社会的条件や伝統に関係しているからである。さらにこれらは自然的発展と大きな雇用者や国の政策としての計画の試みによって発展をとげてきたし，また引き続き発展していく」[50]ことが予想されるのである。

以上これまで検討してき分散，凝集，離心，再集中という都市の遠心力の作用による成長は，地域社会変動にどのような意味をもつのであろうか。ディキンソン氏によれば，この点での都市化とは，都市周辺の農村の都市化であり，都市・農村の融合化，一体化であり，さらに，かつてそれ自体ある範域の地域社会の中心としての機能をはたしていた，中心都市の影響圏内にある諸農村センター，町，地方小都市の中心都市への従属とそれら諸都市間におけるヒエラルキー的秩序の形成と中心都市を中核とし，中心都市の影響圏という同質性をもつリージョンとしての新たな地域社会の形成ということに他ならないのである。すなわち，都市化の「空間的

表現は四重の意味がある。第1に都市の外れには発展・拡大しつつある，或る面では都市でありまた或る面では農村である縁があるということ。第2に，都市から放射状に走るハイウエイに沿ってリボン状発展，あるいは道路に沿った建設がみられること。第3に縁辺帯よりは範囲が大きいサービス圏のなかにある都市の周囲に発展が拡がること。第4に，都市の外に衛星副都心ができ，それ自体が縁辺帯リボン状発展とサービス圏をもっているということである。このようにして『村は小さな圏の中心となり，町は広い圏の中心となり都市は最大の圏の中心として機能する。大小の圏は，各々の中心がその次に大きい中心に包摂される形をとって階層をなしてる』」[51]のである。

この都市化の結果として，もはや，都市・農村の区別（distinction）は無意味なものとなるという。それは，土地利用形態，産業および就業構造，そして，生活様式などの点から見て言えることなのである。ディキンソン氏いわく，「何世紀にも亘って農業を基盤としてきた地域社会が，今や大部分は，就業構成という点からいって，非農業的職業の方向に進んでいる。農村に住む労働者は遠距離を――ヨーロッパでは自転車，鉄道，あるいはバスで，合衆国では自動車で――通って仕事に行くことができるようになった。近年の都市の与えるサービスの数と複雑さが現象的に増加したことが，都市の与える影響の範囲と特に強さを拡大していった。その結果，農村地域は実際上都市連合の一部となり，昔の農村と都市の区別は今や無意味になった」（傍点は引用者による）[52]と。さらに，都市化が農村における生活様式を都市的なものに変えていくことに関してディキンソン氏は次のように論じていた。すなわち，上述してきた「風に村の社会的構造および町と村の相互関係における基本的変化が現われた。村落社会は隣接の村落や小さな町においてサービス業が発展し集中することからいろいろな意味で影響を受てきている。農村文化は都会的生活様式から圧力を受けた。すべての都市集合体の近郊では，農村社会の均衡を崩す変化が，農村生活の条件や様式に現われた。町と村とは相互関係として非常に深く接触を持っていたので，事実上都市と農村の生活様式間にはっきりとした区別をすることはできない」[53]と。

リージョン内における村－町－都市－中心都市という諸地域センター間のヒエラルキー関係については，ディキンソン氏はどのような議論をしていたであろうか。氏によれば，この点では，「国勢調査の職業データよりはむしろ，地域中心が提供するサービスや施設の分析をもとにした都市の階層 hierarchy」[54]が重要であるという。同じく氏は，クリスタラー氏の中心性の理論を援用し，ドイツを例にとって，都市間の地位と序列を表2のように表した。この表にある，「市場中心（M）はその隣接地から7～9㎞の距離に普通位置し，サービス半径は4～5㎞である」[55]。「アムツオルト（A）は最下位の行政中心で，それは普通三つの市場町とその教区に奉仕している」[56]。「ベチルク（地区）中心（B）はこのようなはっきりとした行政上の定義づけはないが，経済的には非常に重要で，行政目的のために，上位の中心地をもつ単位としてクライスの数地区を集めて高次の中心をもつ単位とする傾向がある」[57]。その「クライス

（郡）中心とベチルク中心地の区別は小都市 Städtchen と都市 Stadt という用語に表現されている」[58]。「ガウシュタット…（G）は，ガウ（小州 Gau）と呼ばれた昔のドイツの社会単位から採った名で，フランスのプロヴァンス（州 province）の小さなものと比較し得る」[58]。「県中心市…（P）はプロシアでのレギールンクスベチルク（県または行政管区…中心），バヴァリアではクライス（郡）の集団と一致する」[60]。そして，「50万人ほどの人口をもつランドシュタット（地方首都…）（L）は，ドイツ，イタリア，およびスペインで非常に顕著である」[61]。さらに，この上に，国家の首都，ライヒシュタット（R）がある。

表2　中心サービスの理論的分布に基づく都市の地位と分布（クリスタラーによる）

都市の序列		人口（約）	相互距離（km）	サービス圏（平方マイル）
Ⅰ. Marktort	M	1,000	4.0	44
Ⅱ. Amtsort	A	2,000	6.9	133
Ⅲ. Kreisstadt	K	4,000	12.0	400
Ⅳ. Bezirkstadt	B	10,000	20.7	1,200
Ⅴ. Gaustadt	G	30,000	36.0	3,600
Ⅵ. Provinzstadt	P	100,000	62.1	10,800
Ⅶ. Landstadt	L	500,000	108.0	32,400

R. E. ディキンソン『都市と広域』木内信藏・矢崎武夫訳，鹿島研究所出版会，1974年より引用

では，かかるリージョン内の諸都市間のヒエラルキー関係は，どのようなメカニズムによって形成されていくのであろうか。ディキンソン氏は，この点に関して，「サービス因子」，「行政的因子」，そして，「工業因子」を重視している。「サービス因子」から見ると，同じくディキンソン氏によれば，この因子に基づく中心地のシステム化にとって，市場原理，交通原理，そして，行政原理の三つの原理が重要な役割をはたしているという。しかし，ここでは紙数の関係でこれら三つの原理をすべて検討する余裕はないので，市場原理にもとづく中心地のシステム化についてだけ見ると，市場原理にもとづく「サービスの始まりは，そのサービスを支えていくのに必要な（通常は全人口により表現された）最小限の需要である。たとえば，店が利益をあげて営業していくためには，その収入の点で限界となる需要が必要である。同様に，学校が効果的に維持されるためには最小の生徒数，つまりある程度の人口を必要とする。同様にして，小さな病院，図書館，あるいは他のいかなる中心化したサービスも，その特定の限界需要と関連してくる。この限界を与えるべき地域は，そこの人口密度，所得の有効性，必要性あるいは好みに依存している。同じ種類のサービスを行なう中心地同士の空間をめぐる競争もまた，この限界に到達できる地域の広さを限定する傾向をもつ」[62]のである。

さらに，述べれば，「消費市場への引力はすべてのタイプのサービスにとって立地を支配する支配的な力ではあるが，サービスは三つの組合せからなる状況に応じて，より広く間をとって位置される傾向がある。第1に，たとえばデパートや技術研究所のような専門化された機関の有効な大きさは，その町のみでなく，広く周囲からも人々をひきよせることができる位置を

要求している。第2に，サービスのタイプにより需要への強度が異なるという事実もまた，村や小さな町よりは大きな町へ，都市地域内においては近隣区よりは中心業務地区へ立地を移動させるに役立っている。このように一般医は田舎町や村に開業するが，脳外科医は大都市でないと成り立たない。同様の事実が，高級商品，たとえば家具や宝石，あるいは専門小売店の位置を条件づける。第3に，輸送が容易になり，速くなってきたことにより，種々のタイプのサービス業にとって局地的市場はその魅力を減少する傾向になってきた。ほんとに，より安価に，より速く顧客と接してサービスすることを可能にするすべての発展が，サービスの質を減ずることなしに，さらに遠くの地を選ぶことを可能にした。これらの状態がサービス業が村から町へ，そして小さな都市から大きな都市に移っていくことの背後にある。これらを考慮することが，広い地域での都市の性格と分布の主要な決定要因であるのみでなく，都市複合体内のサービス機関の性格と分布をも決定する要因なのである」[(63)]。

次に，ディキンソン氏の「行政的因子」に関する議論を見てみよう。氏によれば，「行政的因子」による地域社会間のヒエラルキー関係は，最終的には近代国家という形で統合されることになったその国内に，さまざまな要因によって歴史的に形成されてきた政治的細分の地域的階層化を通して確立してきたという。すなわち，はじめシティという言葉は「ラテン語のcivitasから出てきたものである。…古代ギリシアやローマにおいては，これらの言葉は都市国家という概念を表していた。それはつまり中心となる活動と生活の焦点をもつ小単位としての国家で，全体でもその地域，人口共に市民の集合体を通して効果的な政治を行なうのを妨げるほど大きすぎることはなかった」[(64)]。それが，後には，宗教上の「司教管区」の範域と重なってきた。さらに，中世にはいると，都市は，「工業と商業，それ自身の法律と市で防禦された町を意味した」[(65)]。また，「中世においては，行政単位としての形成と同じく，文明の中心としての町がグループ感情と組織をもった区域をまとめあげるのに最も重要な要因となった」[(66)]。さらに，「町はまた交易と裁判行政を周辺の地区に対して行なう支配的中心地としても出現した」[(67)]。近代にはいって，「17，18世紀は政治的文化的州郡の全盛期であった」[(68)]。「多くの重大な変化が18世紀末に起こり，またヨーロッパの行政単位においても19世紀初期に変化があった。これらの変化は現代工業の発達と鉄道出現の直前，道路を使用しての輸送の最盛期に起こった。最も重要な変化は，フランスで歴史的な州の代わりにデパルトマン（県）départmentが創られたことであった。各々の県は行政の中心をもち，そこへは県内のどの部分からでも1日旅をすれば到達するようにされていた」[(69)]。「イギリスでは19世紀の幕開けに，教区と郡という二つのタイプの行政地区があっただけであった。1834年には救貧法施行のために新しい地区が設立された」[(70)]。そして，「サービス因子」を検討した際に見てきたように，商業的交易のより以上の発展にともなって若干の変動がもたらされてきたのである。

これらの成果として，現代における「州内の政治的細分の階層とそれらに連なっている行政中心地の地位には明らかに整合性がある。西ヨーロッパや合衆国の東半分におけるように，一

様な中心都市網をもった連続した農村集落の外観を示すところでは，クリスタラーと同様に，最小の集村＝村落 village が六角形の教区，コミューン commune，あるいはゲマインデ Gemeinde の中心にあるという根本の分布を推測できる。行政原理は七つの中心という結果をもたらす。最下位の行政中心には隣接の六つの六角形をしたコミューン（地域社会）に対する司法権をもつ一つのコミューンがなるだろう。これが階層の第１段となる。次の第２段の行政区分の序位は第１段階の六つの中心，というか合計６×７＝42コミューンに権力を行使する中心を含んでいる。次の３次の順位は第３段階のなかの一つの中心地を含み，六つの第２段階，それらの各々が第１段階を42含んでいて，合計294コミューンということになる。（これらの数字には各々のレベルの行政中心地は除外されている。）このことは国都１，州都の首府が６，42の第２段階の首府と294の第１段階の中心地ということになる。数か国がこのような約７重の区分をもっている。その例としてはオーストラリア，コスタリカ，アルジェリアがある。多くは約49区分であり，その例はスペイン，ギリシア，ジャワ，合衆国，イギリスとウェールズである」[71]。日本もその例であろう。

ディキンソン氏によれば，商業上の交易圏と行政のための範域は必ずしも一致しないのであるが，おおよそのところで重なる場合も多いという。というのも，行政上の地域分布は，「市場地域に対応して行政的中心のある行政地域の必要性から起こってきた」[72]からである。すなわち，「理想的な行政単位は，中心に首府をもち，低い段階の行政中心地群に伴い，隣接地域に接し人口の少ない外縁地域をもっている。過去においては，自然境界を政治上の境界として使用するという防衛の必要性が，第一の動機であったが，交易および文化上結び付きを分ける限界，それは必ず人口密度の低い地と対応しているが，それが現在でも隣接する行政単位――州，地方，あるいは州内の地方区域――であっても，理想的な境界線をなしている」[73]のである。

ディキンソン氏によれば，「工業因子」は，ある範域の地域内における諸都市間のヒエラルキー構造形成にとって，「サービス因子」や「行政的因子」とは異なった独特の特質をもっているという。というのも，工業の立地は，その産業的特質ゆえに，必ずしも中心都市を核とした都市間ヒエラルキー関係に対応するものとはならないからである。むしろ，工業の立地は，そうした都市間ヒエラルキー構造とは相対的に自律して行なわれ，場合によっては，都市的地域でないところに工業的大都市を生みだすこともあるのである。ディキンソン氏いわく，工業という「産業活動の空間的結合についてここで特に述べなければならない。それは中心都市を通して開かれることもあれば，そうでないこともある。産業はその生産物とサービスを効果的に分け合い，交換しあえるように集まる。溶鉱炉と製鋼炉の近接性から生まれてきたのが規模の経済である。コークスをつくる，鉄をとかす，鋼鉄をつくる，そしてロールを動かすといった作業は，連続する製造過程の種々の段階であるので一緒に位置する。同じ材料を使用したり，補足的な商品を生産する産業は集まる傾向がある。このような例が毛織物と毛糸工業であり，ま

た自動車とその部品の関係なのである。また同じ労働資源を使用することによる結合もある。あるタイプの工業に依存している町では他の工業に使用されうる労働力をもつ。ニュージャージー州のパターソンの絹織物工場がスクラントン地域に移ったのがこの例で，そこでは炭鉱夫の妻や娘たちが労働力供給源となった。同様にして婦人の労働力を雇う軽工業は，主に男性の就業している地――たとえば海軍根拠地や炭鉱の中心地――に立地する見込みがある」[74]のである。

さらに，上記の点に関して敷衍しておくならば，ディキンソン氏によれば，「工業を都市内で一定の場所に立地させる地域市場の役割は，都市成長の研究のなかでは一般に不当な評価を受て」[75]きたという。というのも，工業製品の市場は，とくにそれが大規模化すればするほど，ディキンソン氏が名づける「局地的」・「地方的」という地域市場をはるかにこえる，「超－地方的」市場に依拠しているからである。一つの国をとっても，例えば，「イギリスは国が小さすぎて，各都市間での基本的には地域的な工業の専門化が不可能」[76]なのである。しかし，同じくディキンソン氏によれば，市場圏とのかかわりでの指標である「基礎的対非基礎的産業の比率」[77]によって測定される都市機能の重要性の視点から見ると，工業は都市の成長にとって重要な意味をもっているのである。すなわち，「都市の機能は，基礎的および非基礎的活動の相対的重要性という視点から説明しうる。…基礎的活動は，外から収入をもたらす故に都市の存在そのものに係わってくる。非基礎的活動は欠くことのできない労働者とその家族にサービスするものである」[78]。それゆえ，「中心都市の役割におけるサービス機能の重要性を測るために様々な試みがなされてきた」[79]が，「第１にあげられ，最も重要な課題は，基礎的，あるいは『都市形成』機能 city-forming と非基礎的または『都市奉仕』機能 city-serving の比率を測定する基準を探し出すこと」[80]なのである。

工業は，「都市形成」機能をはたす基礎的活動である。ディキンソン氏によれば，工業，すなわち，「『地域社会の職業ピラミッド』と呼ばれるものの基礎をつくる産業は，三つのグループに分けられる。第１は，特定の場所にしばりつけられている原料志向型産業――採鉱，造船と金属精練，化学や他の『重工業』――である。これらは石炭や鉱物の生産地，潮路，または集積に便利な場所にある。第２は過去に隠された起源をもつ産業がある。すなわち歴史的偶然によるもので，もはや力を失った地域化の要因であるが，そこに立地されたものである。これらのなかには動力が安く得られること，その地の技術とか安い労働力，あるいは関連産業やサービスの存在があげられる。イギリス，ヨーロッパ大陸や合衆国でのこの範疇に属する典型として織物工業があげられる。これら二種が二，三の固定した地に高い集中度をみせている定着性工業 immobile industry の事実上ほとんどの場合を占めている。したがって，これらは主として地域市場のためにできたものではない。第３は比較的動きやすい，あるいは『根無し』工業で近年の発達にかかり，これらは普通総生産費のなかで分配と原材料集中のためのコストが小さく消費者向けの生産にたずさわっている。これらの工業は交通の便がよく，市場に容易

に近づけ，労働力供給源の近くであるか，あるいは製造業者の住宅の近くの場所におかれることが多い。一方では自動車や電気工業の場合のように，可動性工業 mobile industry は，部分的には高度に地域化されている。その反面，地域市場を効果的にカバーするようすべての大都市におかれている新しい消費者工業も幅広く存在する」[81]のである。

また，ディキンソン氏によれば，「地域社会の職業構成に関連する第2の構成要素はサービス業である」[82]。このサービス業の「顧客の地理的分布の詳しい分析」[83]によれば，「サービス業の多くや基礎的産業でさえも，その生産物やサービスで外部の世界と同様『局地的』あるいはさらに広い『地方』の要求をカバーする市場をもっていることが明白になる」[84]。こうして，「その地の人口の要求を満たしたその上に周りの地方の工業やサービスは職業ピラミッドの基盤の構成部分として，都市では大変重要であることが明らかになるだろう。地域中心としての都市の機能がその場合のその存在理由になる。地方的な志向性をもつ製造工業は二重の視点から考察できる。一方においては，その地方から出される原材料――木材，家畜（屠殺と肉のかん詰），農業生産物加工に関連したもの（ビート工場，醸造工場，製粉工場，かん詰等）と，製造品に仕上げ加工するもの（染物や織物の仕上げ等）とがある。その反面消費物質，生産品の両者が従属地域全体に分配するために都市内で製造されたり（あるいは他の都市から卸売されたり）することがある――それらは農業機械，肥料，金物等である。広く大都市に位置しているこの種の産業には他に印刷，出版や製本，光学技術，パン製造，ビン詰工場，衣服，公共事業サービスや建築業がある。二，三の特別の工業が，大都市の産業構造を支配しているかもしれないが，それでも，普通多様な性格をもつ故に，商業，行政や公共サービス全体の就業者がすべての種類の工業の職数を上回っているということが次第に明らかになる」[85]のである。

こういう傾向のなかで，工業がある都市そのものの性格となっている「工業都市では，住民は圧倒的に工業に依存しており，その工業就業者に他の職業のグループも収入源を依存している。住宅機能は大して重要でない。後背地の工業は，工業町のそれと全く同一である。工業が町の収入の5分の4以上を占め，これは明らかに残る他の職業にはね返っている」[86]のである。

ディキンソン氏によれば，こうして，都市のサービス機能を基軸として作用する中心化の力によって，以下のような都市の中心地の階層が形成されるのである。すなわち，アメリカを例としてとりあげてみると，「組み込まれている中心地の階層は六つの序列がある。これらはシカゴ地域と中西部の一貫した研究から描き出されたものであるが，この上に第7の序列としてニューヨークという首位都市 primate city のユニークな存在が加わるであろう。図(1)で示されるように6段階の中心地は特殊化の程度が増大し，ここでは階層の巣ごもり的な性質がピラミッド型として表されている。ピラミッドの段階毎に三角形が示され，これによってすぐ上位の機能のなかで専門化する少数機関と立地の基盤としての各々の機能が任務を果たしていることが分かる」[87]〔(1)は引用者による〕のである。また，「組織の地域的単位の階層は，機能の

階層に一致する。これらの機能は，低次から高次の段階へ，消費，小売業，卸売業，積替（基本的には船荷の荷揚げ），交換（売買のビジネス），管理（主要な地方経済に対する経済力の集中），それに首位都市のもつ指導である。これらの活動の各々が，次の高次の部門に基調を与え，最終のものよりは低次の中心地の各々の特徴的機能をすべて覆い包むことになる」[87]のである。

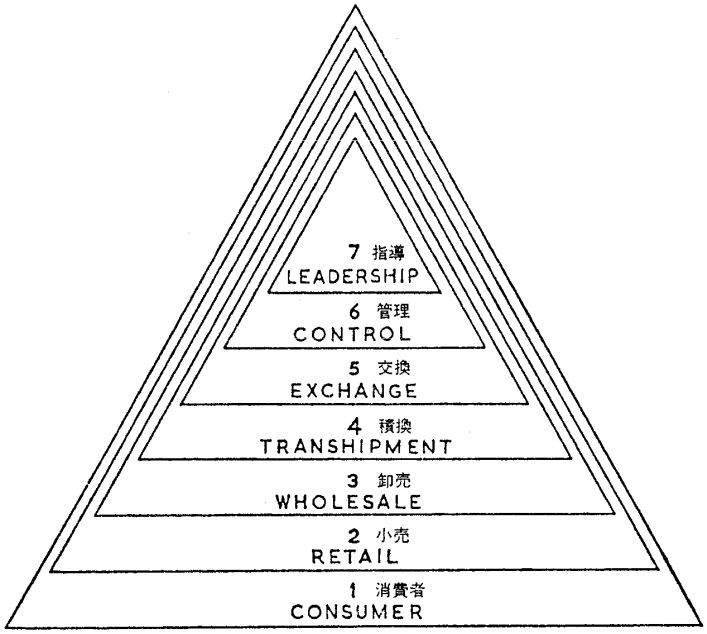

図１　**七重の機能の階層**（フィルブリックによる）
機能は低次のものが高次のものを包む（巣ごもり）する形となる。

R．E．ディキンソン『都市と広域』木内信蔵・矢崎武夫訳，鹿島研究所出版会，1974年より引用

註（1）R．E．ディキンソン『都市と広域』木内信蔵・矢崎武夫共訳，鹿島研究出版会，1974年，22頁。
（2）ここでいう第一次産業には，鉱業が含まれている。それは，産業の１，２，３次の分類は，国によって少しずつ違っていることによる。
（3）ディキンソン，前掲書，22～23頁。
（4）同上，109頁。
（5）同上。
（6）同上，21頁。
（7）鈴木栄太郎『鈴木栄太郎著作集Ⅷ』未来社，1975年，220頁。
（8）ディキンソン，前掲書，113頁。
（9）同上，198頁。
（10）同上，198～199頁。
（11）同上，198頁。
（12）同上，34～35頁。
（13）同上，35頁。
（14）同上。
（15）同上，22頁。

(16) 同上，23頁。
(17) 同上。
(18) 同上，24頁。
(19) 同上，23頁。
(20) 同上，23～24頁。
(21) 同上，24頁。
(22) 同上，25頁。
(23) 同上，24頁。
(24) 同上。
(25) 同上。
(26) 同上，43頁。
(27) 同上，43～44頁。
(28) 同上，44頁。
(29) 同上。
(30) 同上，45頁。
(31) 同上。
(32) 同上。
(33) 同上。
(34) 同上，45～46頁。
(35) 同上，46頁。
(36) 同上。
(37) 同上。
(38) 同上，46～47頁。
(39) 同上，47頁。
(40) 同上，47～48頁。
(41) 同上，49頁。
(42) 同上，36頁。
(43) 同上，49頁。
(44) 同上，50頁。
(45) 同上，50～51。
(46) 同上，51頁。
(47) 同上。
(48) 同上，51～52頁。
(49) 同上，52頁。
(50) 同上，53頁。
(51) 同上，36頁。
(52) 同上，51頁。ディキンソン氏は，この引用文のなかで，もはや都市・農村の区別は意味がなくなったといっているが，それは，「昔の区別（the old distinction）」がなくなったといっているのであって，決して，区別一般，または，対立がなくなったといっているのではないことに，注意する必要がある。
(53) 同上，98頁。
(54) 同上，83頁。
(55) 同上，84頁。
(56) 同上。
(57) 同上。
(58) 同上，84～86頁。
(59) 同上，86頁。
(60) 同上。
(61) 同上。
(62) 同上，59頁。
(63) 同上，58頁。

(64) 同上，67頁。
(65) 同上，68頁。
(66) 同上。
(67) 同上，69頁。
(68) 同上。
(69) 同上，69～70頁。
(70) 同上，70頁。
(71) 同上，71～72頁。
(72) 同上，64頁。
(73) 同上。
(74) 同上，75～76頁。
(75) 同上，73頁。
(76) 同上。
(77) 同上，76頁。
(78) 同上。
(79) 同上，77頁。
(80) 同上。
(81) 同上，73～74頁。
(82) 同上，74頁。
(83) 同上。
(84) 同上，74～75頁。
(85) 同上，75頁。
(86) 同上，92頁。
(87) 同上，93～94頁。
(88) 同上，94頁。

A Theory on the Relationship between Urban and Rural Society from the Point of View of Marx's Theory of Social Reproduction of Capital

UCHIDA Tsukasa

It is now generally believed by a good many rural and urban sociologists that it is anachronistic to study rural or urban societies in trying to come to terms with the antagonistic urban-rural relationship. Moreover, it is held that not only the distinction between rural and urban, but also the antagonistic urban-rural relationship have disappeared in a real sense as a result of the radical changes in rural and urban societies, especially in the midst of rapid economic growth, as seen in Japan as well.

This series of articles constitutes an argument against this position. I intend to make clear that the viewpoint of overcoming the antagonistic urban-rural relationship is still important in studying a variety of modern social problems. They include the antagonism between advanced and developing countries, international and domestic disputes, overpopulation in urban areas and depopulation in rural areas, urban social problems, environmental and energy problems, and so on, which have arisen as a result of unequal and unbalanced regional development on an international and national scale under the globalization of modern capitalism. This article is one of the series. In it, I intend to examine Dickinson's theory of region. Dickinson insisted that the old distinction between rural and urban was now virtually meaningless.

（うちだ　つかさ　本学人文学部助教授　生活構造論専攻）